

令和6年度病虫害発生予察注意報(第3号)の発表について

病虫害防除所では、果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ)の果樹園への飛来が平年より多くなると予測されたため、令和6年5月10日に「病虫害発生予察注意報 第1号」を発表しました。その後も果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)の発生が多く、引き続き、果樹園への飛来が平年より多くなると予測され、ナシをはじめとした果樹への加害が懸念されます。そこで病虫害防除所では、被害を最小限に抑えるため、生産者が十分な対策を講じるよう病虫害発生予察注意報を発表しましたので、お知らせいたします。

○病虫害発生予察注意報

「病虫害発生予察注意報」は、病虫害の多発生により農作物に大きな被害が発生すると予想され、かつ早急に防除対策を講じる必要がある場合に発表されます。

○果樹カメムシ類の発生生態について

果樹(ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ等)を加害するカメムシは数種類あります。県内での主な加害種は、体長約11mmのチャバネアオカメムシ(写真1)です。チャバネアオカメムシは、山林の落葉下等で越冬し、5~6月にサクラやクワの果実、7月以降にスギやヒノキの球果を主な餌として移動します。移動の途中や餌の不足により、一部の成虫が果樹に飛来し吸汁します。



写真1 チャバネアオカメムシ

○果樹カメムシ類の被害について

果樹カメムシ類は、口針と呼ばれる口を果実に刺して、果汁を吸います。肥大途中で吸汁された果実は形状が悪くなり、商品価値が著しく低下します。



写真2 ツヤアオカメムシ

○本年の果樹カメムシ類の発生状況について

7月上旬現在、チャバネアオカメムシ(写真1)の予察灯への総誘殺数* (本年値1,604頭、平年値289頭)、直近1か月の誘殺数* (本年値486頭、平年値83頭)ともに平年より多い状況です。(※総誘殺数(4月第1半旬~7月第1半旬)、直近1か月の誘殺数(6月第2半旬~7月第1半旬))

ツヤアオカメムシ(写真2)の予察灯への総誘殺数(本年値668頭、平年値30頭)、直近1か月の誘殺数(本年値336頭、平年値17頭)ともに平年より多い状況です。本種は暖地性で大型のカメムシであり、例年発生が少ないですが、本年は発生が多い状況です。

クサギカメムシの、予察灯への総誘殺数(本年値38頭、平年値7頭)、直近1か月の誘殺数(本年値31頭、平年値6頭)ともに平年より多い状況です。

このため、今後、果樹カメムシ類の果樹園への飛来が、平年より多くなるおそれがあります。

○防除対策

果樹カメムシ類の飛来状況は、地域や園周辺の環境等によって異なりますので、園内外をよく観察し、飛来状況に合わせて薬剤防除を行う必要があります。なお、薬剤を使用しない防除法の一つとして、多目的防災網(目合い6mmまたは9mmクロス等のネット)の展張により、果樹カメムシ類の園内への侵入が抑制され、被害軽減できます。

果樹を加害する果樹カメムシ類の多発生が続いています

～引き続き園内への飛来に注意して下さい～

[発表の内容]

作物名 : 果樹類 (ナシ、カキ、リンゴ、ブドウ等)

害虫名 : 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)

発生量 : 多い

発生地域 : 県下全域

[発表の根拠]

- 7月上旬現在、チャバネアオカメムシ (写真1) の予察灯への総誘殺数* (本年値 1,604 頭、平年値 289 頭)、直近1か月の誘殺数* (本年値 486 頭、平年値 83 頭) とともに平年より多い (図1)。
- 7月上旬現在、ツヤアオカメムシ (写真2) の予察灯への総誘殺数 (本年値 668 頭、平年値 30 頭)、直近1か月の誘殺数 (本年値 336 頭、平年値 17 頭) とともに平年より多い (図2)。本種は暖地性で大型のカメムシであり、例年発生が少ないが、本年は発生が多い。
- 7月上旬現在、クサギカメムシ (写真3) の予察灯への総誘殺数 (本年値 38 頭、平年値 7 頭)、直近1か月の誘殺数 (本年値 31 頭、平年値 6 頭) とともに平年より多い (データ省略)。
*総誘殺数は (4月第1半旬～7月第1半旬)、直近1か月の誘殺数は (6月第2半旬～7月第1半旬)

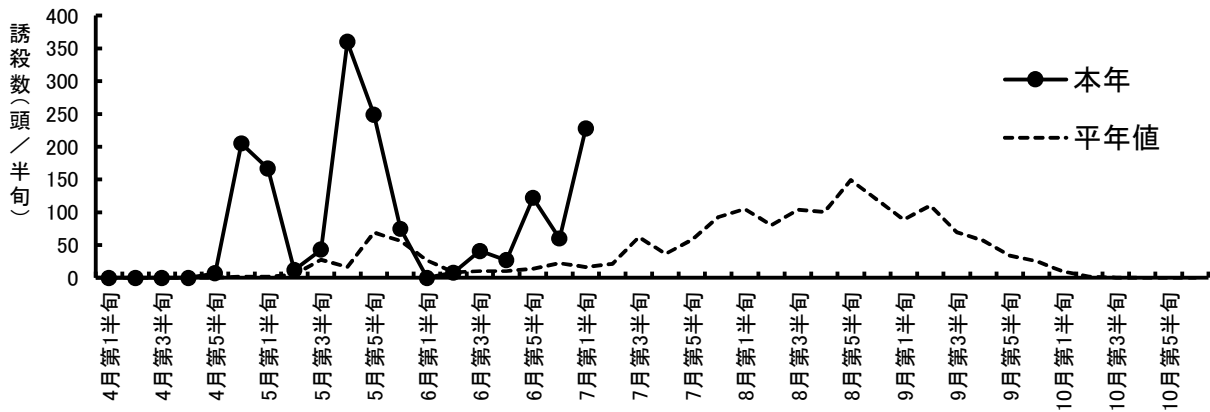


図1 チャバネアオカメムシの予察灯 (かすみがうら市) への誘殺数

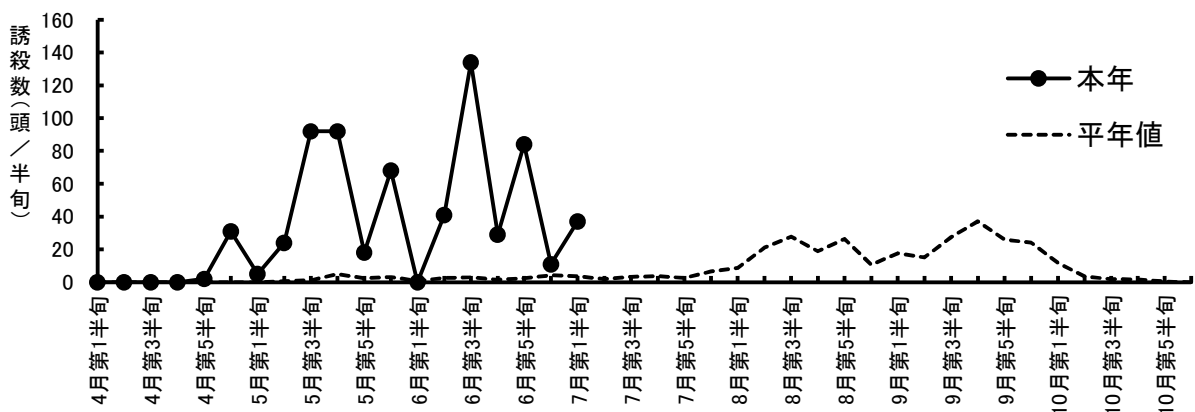


図2 ツヤアオカメムシの予察灯 (かすみがうら市) への誘殺数

〔防除対策〕

- ① 多目的防災網（目合い6mmまたは9mmクロス等のネット）はカメムシ類の園内への侵入を防ぐため、被害軽減に有効である。
- ② カメムシ類は夜温が高くなると活動が活発になり、果樹園に飛来する。果樹園内でカメムシ類を確認した場合は、活動の鈍い早朝に薬剤防除を行う（表1参照）。いずれの薬剤も、直接虫体にかかれば殺虫効果は高い。
- ③ 有機リン系およびピレスロイド系薬剤は、カメムシ類に対して効果が高いが、天敵類に及ぼす影響も大きく、ハダニ類やカイガラムシ類の多発生を招くおそれがあるので注意する。
- ④ カメムシ類の発生時期や発生量は地域や圃場によって大きく異なるため、定期的に圃場全体を観察し、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。
- ⑤ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページを参照する。
<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/index.html>

表1 カメムシ類に登録のある主な薬剤（令和6年7月1日現在）

作用機構分類（IRACコード） 系統名	薬剤名	ナシ	カキ	ブドウ	リンゴ
1 B 有機リン系	スミチオン水和剤40	○	○		(○)
2 B フェニルピラゾール系	キラップフロアブル		○		○
3 A ピレスロイド系	アグロスリン水和剤	○	○		
	スカウトフロアブル	○	○		○
	テルスターフロアブル	○	○		○
	ロディー水和剤	○	○		○
4 A ネオニコチノイド系	アクタラ顆粒水溶剤	○	○		○
	アドマイヤー水和剤	○	○		
	アルバリン顆粒水溶剤/ スタークル顆粒水溶剤	○	○	○	○
	ダントツ水溶剤	○	○	○	○
28 ジアミド系	バリアード顆粒水和剤	○			○
	テッパン液剤	○	○	○	○

注）・○：当該作物に農薬登録あり。ただし、各薬剤の収穫前日数には十分注意する。

- ・(○)：スミチオン水和剤40は、リンゴ（旭種とその近縁種）では薬害が発生のおそれがあるので注意する。
- ・テッパン液剤は、多発生時に使用する場合、効果が劣ることがあるので注意する。
- ・ブドウでは、栽培状況により果粉溶脱や汚れのおそれがあるため、農薬ラベルに書かれた使用上の注意事項及び使用方法を必ず確認する。
- ・農薬を使用する際は、ラベルに記載されている使用基準、注意事項を必ず確認のうえ使用する。また、周囲への飛散（ドリフト）に十分注意する。



写真1 チャバネアオカメムシ



写真2 ツヤアオカメムシ



写真3 クサギカメムシ